

香芝遊学・創刊十号特別企画

太陽の道



穴虫峠と太陽の道

小川光三

三輪山と二上山を結ぶ箸墓伝説

石野博信

峠の少女

屯鶴峰ものがたり

侃諤倶楽部

穴虫峠と太陽の道

小川光三 〔文・写真〕

大和では遠い昔から、三輪山の日の出と二上山の落陽は、大和に住む人々の生活の原点だと言いつたに違いない。三輪山から出て二上山に沈む太陽の運行が、単なる自然現象を越えて、人々の生活と深いかわりをもつようになったのは、大和に稲作農耕がもたらされて以来のことであった。

だが、こうした太陽の去来する光景は、やがて人々の魂の去来とオーバーラップされるようになる。死者の魂は二上山の彼方に去り、やがて再び東方から再来すると考えられる。そして古墳時代になると、人々は地上に正確な東西線を意識し、ここに太陽祭祀の場を配置して、「太陽の道」を設定するようになった。このような東西線の存在は、果たして偶然だろうか。

黄葉を詠む

大坂を わが越え来れば 二上に
もみじ葉流る しぐれ降りつ

〔万葉集 卷十〕

大坂は逢坂とも書く峠道で、穴虫峠のことである。またこの付近を大坂山と言いつた。石器の原石サヌカイトの産地として知られている。明日香から河内へと越える峠道は、二上山の南を越える竹之内峠が知られているが、この山の北の山麓に沿って、西へ越える穴虫峠を越える道も古くから重要な

街道であった。しかも大和平野から河内にぬける峠の中では最もなだらかで、峠とは言えないほどのゆるい坂道であるためか、交通の要衝として重視され、『日本書紀』

（以下『紀』と称す）天武天皇元年（六七三）の条には、壬申の乱のとき、佐味君少麻呂が数百人を率いて大坂に駐屯したほか、同八年には関を大坂山に置いたとある。またさらにさかのぼって『崇神紀』九年三月の条には、「天皇の夢に神人有して、誨へて曰はく、『赤盾八枚・赤矛八竿を以て、墨坂神を祠れ。亦黒盾八枚・黒矛八竿を以て、大坂

神を祠れ』とのたまふ。」とあり、続いて同四月の条には「夢の教える依に、墨坂神・大坂神を祭りたまふ。」と記している。

この大坂神を祀つたのは香芝市穴虫の式内大社「大坂山口神社」であるとされているのだが、同名の神社が東北へ約八百メートルの逢坂にもある。またこの大坂山口神社が『崇神紀』の大坂神であるか否かも判然としない向きもあるが、穴虫峠のあたりに大坂神を祀つたことがこの山口の神の起源であろう。崇神天皇は古墳時代初頭の大王とされるから、大坂は三世紀の後半に



松原神社

は、既に大和から河内へと越える西の要衝であった。一方墨坂は大和平野の東、三輪山の南脇から、長谷を抜けて東国へと通じる伊勢街道の坂を登り切り、現在の榛原町西峠の、「天神の森」と呼ばれる処がその故地とされ、ここに墨坂神社があったのが、後に一キロほど南東に遷座したのが現在の神社であるとされている。つまり崇神天皇は、大和平野から東と西に通じる最も主要な峠に盾と矛を並べ、ここに神を祀って悪霊の侵入を防ぎ、「これによりて疫の気悉に息みて、国家安らかに平らぎき」と『崇神紀』に記されている。

このように穴虫峠のある大坂の一带は、古墳時代以来の重要な要衝であったが、私がこの峠に注目したのは、ここが落陽の信仰に深いかわりを持つことに気が付いて以来のことであった。

『崇神紀』六年の条には、天照天神を倭の笠縫邑に祀つたと記されている。天照という神は日本神話では主役のような神であるが、これを祭祀したという記事はこれが初見で、この神が大和朝廷が発足した古墳時代初頭以来の神であることを物語っている。ところで笠縫邑は複数の伝承地があつて明確ではないが、三輪山の北側の山中と山麓、そして平野の中にあつてほぼ東西に展開し、そのいずれにも天照の神を祀る古社や神山が点在している。だがそのなかでも、これらは三輪山西北麓の松原神社とするのが定説で、松原は「日原」とも記され、古くから天照大神を祭祀する格式高い古社として元伊勢と称されている。



松原神社より望む穴虫峠の落陽（春分）

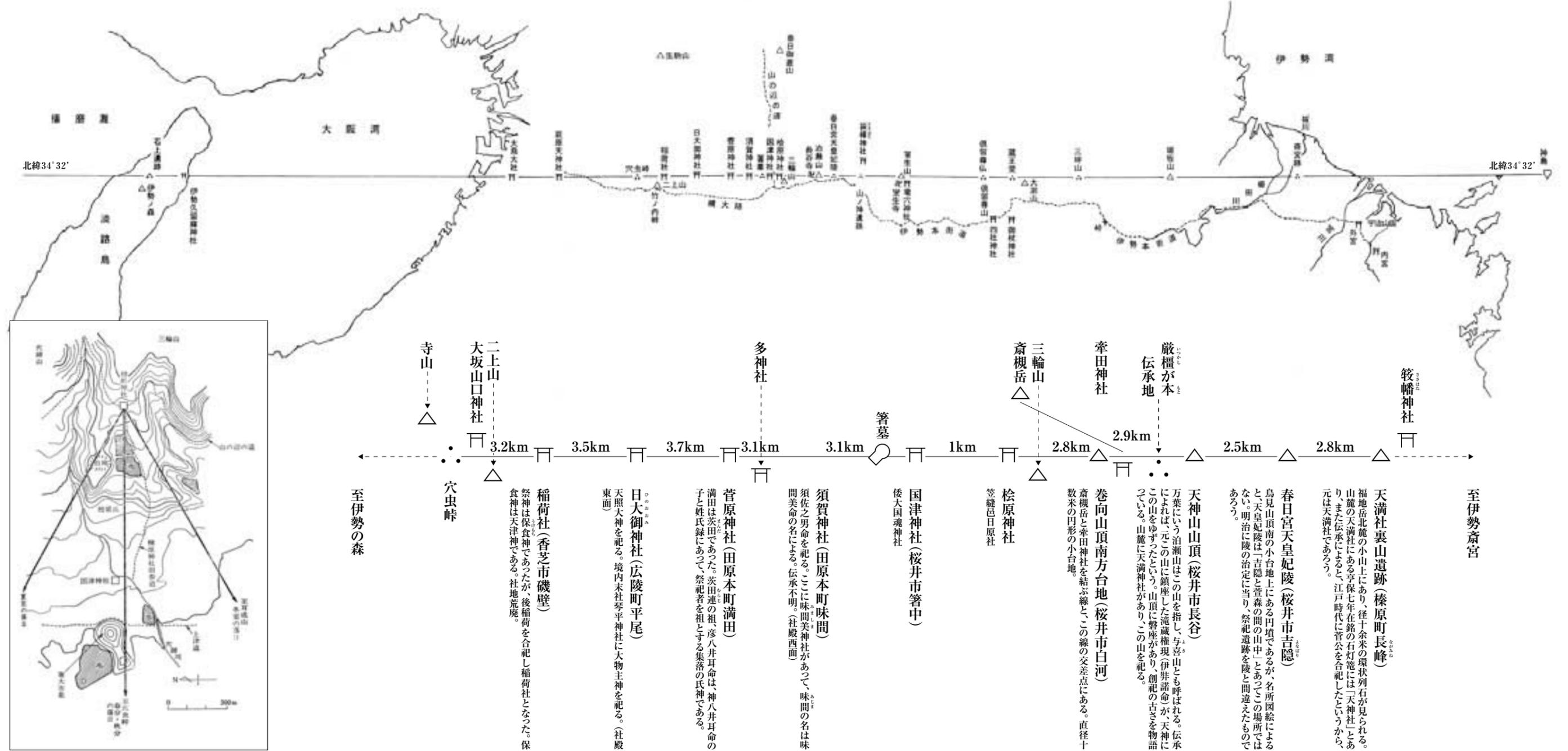
松原神社には古来本殿が無く、三輪山の深い杜を背にした三ツ鳥居を透して拝むという古式の祭祀の形を今に伝えている。ところが西に向かつて立つこの鳥居を透して拝む真東の方向は三輪山頂ではなくここから直接には見えない三輪山の背後の泊瀬山を拝むことになる。

みもろつく 三輪山みれば 隠り国の
泊瀬の松原 おもほゆるかも

（万葉集 巻七）

この歌にある「泊瀬の松原」とは松原神社のことで、「三輪山を仰ぎ見ると、その麓にある泊瀬の山を遥拝する松原神社が想われる」という意味である。泊瀬山は古来天照大神の影向（神仏が姿無く出現されること）の山として崇敬され、『万葉集』では「隠り国の泊瀬の山」として知られているが、現在この山は、天照大神が天津神の主神であることから天神山、またこの神が出現される良き山として与喜山と呼ばれている。

笠縫邑の松原神社は三輪山の山麓とは言え、平野より一段高い見晴らしの良い位置にあつて、すぐ西の山裾には最古の巨大古墳として知られる箸墓古墳が見える。そしてその向こう遙かに大和平野を隔てて二上山を望む。そこで地図を出して正確に真西を計測すると、二上山の北の麓が、すぐ隣の寺山の南の麓と交差した地点で、これが穴虫峠であった。つまり松原神社から見て、太陽が真東から出て真西に入る春分と秋分に落陽を見るのが穴虫峠であるのだが、特に春分は稲作を開始する日とし



松原神社より望む落陽の方向

重要な意味を持っていた。また夏至から冬至までの太陽の運行の角度は六〇度であるが、この神社から見て、冬至には耳成山、夏至には信貴山の辺りの落陽が目安になる。つまり一年にわたり、落陽の位置によつて季節を観測するには、この小高い場所がまことに都合が良い。古代の中国では春分・秋分・夏至・冬至を四至と言ひ、大切な季節の折り目として祭祀を行つていたが、ここは落陽の位置によつてこの折り目の日を知る格好の場所であった。笠縫は嵩日とも書くが、嵩日とはカサヌヒで日を重ねること、つまり一年の暦、カレンダーを作ることである。日本には稲作の国であるが、稲は日本に自生しない南方性の植物で、これを北限に当たる我が国で栽培するには暖かい季節に限定される。こうした季節を読むのが太陽の運行で、それによつて日を知る人を「日知り」といい、日知りが「聖」の語源である。また日本の暦は伊勢の神宮暦が初めだとされるが、伊勢神宮では今も毎年「気象庁の観測による極めて詳しい『神宮暦』が発行されているところを見ると、天照大神は笠縫、つまり太陽による暦の観測と深いかわりがあると考えられる。

天照大神は崇神天皇のとき倭の笠縫邑に祀られた後、次の垂仁天皇のとき倭姫に付けて伊勢に遷宮されたが、その場所は現在の伊勢の内宮ではなく、伊勢の斎宮跡が内宮の故地だとされている。そして斎宮は松原神社の真東で、その間には泊瀬山―室生山―堀坂山など太陽祭祀の山頂や遺跡が連なり、さらに斎宮の真東の伊勢湾上に神島を望むことが出来る。一方松原神社から西へ、箸墓古墳から穴虫峠までの大和平野には、点々と四方所のほぼ等間隔に太陽祭祀にまつわる神社が並び、峠を越えて萩原天神、そして堺の大鳥大社。ここから大阪湾を渡つた淡路島には伊勢久留馬神社、その西には山頂に天照大神を祀つた伊勢の森という山がある。東の伊勢から西の伊勢まで、紀伊半島を貫く一六〇キロに及ぶこのラインには太陽祭祀の遺跡が多いことから私が「太陽の道」と名付けたのは三〇年以前のことだが、その中心は松原神社から穴虫峠への東西線である。

大穴道 少御神の 作らしし 妹勢の山を 見らくもよしも 柿本人麻呂 (万葉集 巻七)

妹勢は妹背で愛し合う男女、それに見立てた会い並ぶ二つの峰を持つ妹背と云う名の山は各地にあるが、この歌では二上山と考えられている。少御神は少彦名命だから、出雲神話でこの神と一対で国造りをしたという大己貴命(大國主神)を大穴道としているのが興味深い。『日本書紀』の一書には大己貴をオオナムチというところがあるが、柿本人麻呂がこれを大穴道としたのは、二上山が大穴への道という思想があったからでは無かるか。

古代では太陽は遙か東の大穴から出て、西の大穴に沈むと考へていた。そしてこの穴に太陽が沈んで再び東方から現れるのは、通過する大穴の中に「常世国」という理想郷があつて、太陽を始め、あらゆる生

小川光三(おがわ・こうぞう)

写真家。1928年、奈良市に生まれる。日本画・洋画を志し青年期を過す。奈良飛鳥園の創始者である小川晴陽の影響を受け、古文化財の撮影に没頭し現在に至る。現在、株式会社飛鳥園代表取締役。

命はここで蘇生して、再びこの世に帰ると信じられていた。本州の東端は太平洋に面した常陸国だが、常陸は常世陸の意で、海の彼方の日が立ち昇る常世に近い陸として日立を常陸と書く。やがて太陽は国々を照らして西の彼方へと沈むが本州の西端は長門国だが、長門は古くは「穴門」と記され、これは太陽の沈む大穴への入り口(門)を意味していた。このように考えると、穴虫は太陽の沈む「大穴への道」の意で、穴道が転訛して穴虫になったのであろう。

太陽の道にある大古墳、箸墓の築造について『崇神紀』には、「故、大坂山より石を運びて造る。則ち山より墓に至るまでに、人民相踵ぎて、手遞伝に(手から手へとリレー式)して運ぶ」とある。重い石を大坂山、つまり穴虫から箸墓まで一六キロ余りの大和平野を運んだというこの話が現実のことであった、この箸墓の葺石に穴虫から産出する石器の原料サヌカイトが多数使用されていることで証明されている。だが何故こうした大変な手間をかけて築造したのか。それは恐らく、西に沈んだ太陽が再び東から再来することく、箸墓の被葬者ヤマトトドヒモソヒメの生命の再来を願つてのことに違いない。

穴虫の峠道は、大和から河内へ通じる交通の要路であった。そしてまた、西の彼方に沈んだ太陽が再び東方から復活することく、人々の生命の再来願う信仰の峠でもあった。

大坂山(穴虫峠)より石を運んで築造した箸墓古墳

